九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか ： 児童精神科医の現場報告』 古荘純一 著

加知, ひろ子
福岡医療福祉大学人間社会福祉学部

https://doi.org/10.15017/19998

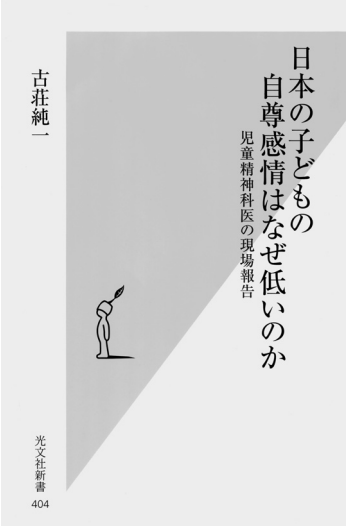
出版情報：生活体験学習研究. 10, pp.91-92, 2010-01-20. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第10号　91－92（2010）

『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』

児童精神科医の現場報告

古　荘　純　一 著



本学会が発足した状況を考えれば、「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」という書名に、本誌の読者にはなんら違和感や新奇さはないだろう。しかし、著者は、「自尊感情」という言葉も知らないという大人にこそ読んでもらって、日本の子どもの置かれた状況や子どもの思いを理解して欲しいと願っている。私たち大人が育った環境とは異なる状況の下で、今の子どもたちが生きているという至極当たり前の、この現実を実感し、自覚し、再認識するためにも有益であると思う。このような書籍を手にする読者は、子どもに無関心とか放任しているというよりも、どちらかといえば、子どもに目を向け、「よりよく育てよう」と努力しているのではないだろうか。その視野を少し広げて、自分自身にも目を向け、自分の生き方、価値観を再考することが求められているようにも感じられる。私の日頃の思いが入った拡大解釈かもしれないが。

この著書の構成は次のようになっているので、子どもに関心さえあればすぐに読める。

はじめに
第１章　注目のキーワード「自尊感情」を問い直す
第２章　子どもの精神面の健康度を測る
―QOL 尺度の開発
第３章　自尊感情が低い日本の子どもたち
第４章　なぜ子どもたちの自尊感情が低いのか
第５章　専門外来で診る子どもたちと自尊感情
第６章　学校現場で子どもたちの心の問題を
サポートする
第７章　社会・教育病理現象と自尊感情
第８章　子どもとどう関わったらよいのか？
あとがき

「はじめに」ではかなりの紙面を使って、著者自身の子どもとも関わり、その中で得られた体験、問題意識などが平易に記され、第１章では、「自尊感情」についての解説もある。そして、「第４章」のタイトルがほぼそのまま書名になっている。この章は、その理由について、筆者自身が日々の仕事を通して、「居場所がない」「疲れた」と訴える子どもたちと接している過程でどうしても考えざるを得なかった問題であり、課題だったと考えられる。

著者は、青山学院大学教育人間科学部教授で、教育学の学生を対象に小児精神神経学という科目を担当し、また、大学病院や専門病院で子どもの心の診察を行い、地域ではスクールカウンセラーや教育委員会からの相談を受けたり、学校現場を訪れたりする立場にあるという。

そのような仕事に携わる中で、日本の子ども生活状況を知るための日本語版 QOL 尺度の開発にかかわり、実態調査を行った。QOL 尺度は６つの下位領域［１．身体的健康、２．情緒的ウェルビーイング(気持ち)、３．自尊感情、４．家族、５．友達、６．学校生活］からなっている。調査結果は、日本の子どもたちが、ドイツやオランダの子どもたちと比べて、QOL 得点が低く、なかでも特に自尊感情や家族、学校生活の満足度が低いことを示していた。まさに、執筆者の負の予想「私の外来に来る子どもたちというのは、もちろん、ごく普通に暮らしている子どもたちに比べれば極端な状況にあるともいえるのですが、逆に考えれば、同じように悩みを抱えている子どもの中でも、比較的早く相談できる人にめぐり合えた、という

側面もあると思います。……、色々な問題を心に抱えている子どもたちが相当数いるのではないか、と気になってしまいます。」(p.4-5) に符合するのである。

親がどのくらい自分の子どものQOLについて理解しているのかを確かめるために、子どもには自分の、親には子どものQOLについて質問し、両者のQOL得点の一致度を調べた。その結果、子ども自身の得点が低い群（全体の中で低い方15%）では、親が回答した得点と子どもの得点とは全く一致せず、親の方が明らかに高く、逆に子どもの方が親よりも高いというケースは一組もなかった。これに対して、対照群の親子の得点は比較的一致していた。得点が低い子どもの方が、現在の生活に満足していないわけで、内面的な問題も多く抱えていると思われるが、そのような子どもたちの親の方が子どもの気持ちに気づいていないのである、あるいは気づこうとしていないのかもしれないが。

QOLの調査で家庭と同様に満足度の低かった学校については、学力の低下も取り上げられている。その中で、「子どもたち一般の傾向として、学習意欲が低いだけなく、学校卒業後も人生において、あえて新しいことに挑戦することを回避する傾向があるように思います。……このような子どもたちにとっては、語学や世界情勢の知識には興味が持てませんし、……。語弊があるかもしれませんが、彼らには、科学的な疑問を認識させる教育よりは、社会的体験を通して知識の再現、習得につとめる教育で十分だとも言えます。……

PISAの報告書や行政の目標は、『たとえ周囲の反対があっても自分の道を切り開いていく子どもたち』を想定しているのでしょうが、実際は、そのような子どもは少数ではないのでしょうか。

国際的に通用する意欲の高い青少年の育成は重要な課題です。しかしわが国の現状では、大多数の子どもたちは、小学校在学中にすでに、自分の限界を悟っているように思います」(p.192-193) と述べている。

また、「小学校３～４年生頃になってくると、自分の能力に限界を感じる子どもが増えてきます。この位の年齢の子を診ていると、学校の勉強はやっても無意味だと考えるようになると、学習意欲がなくなってくるのがよくわかります」(p.181) とも述べている。ちょうど「９歳・10歳の壁」と言われている時期である。すべての子どもに同じ教育目標を立てることの意味を問い、問題提起しているように感じられる。

イギリスの初等教育の指導者であるMarilyn Fryer教授の「現実には生産に必要な教育がなされ、個人のニーズあった教育がなされているわけではないという危機感から、英国では敢えて“創造性教育”という柱を立て、強調している」(日本教育心理学会第51回総会（2009.9.20-22.）特別講演「英国の創造性教育：過去･現在･未来」より）と語っていた。

日々の診療や学校現場での事例から得られた知見をまさに個々人の聞き取り調査のように活用しながら、長期にわたる調査結果を虐待、いじめ、不登校、薬物依存、発達障害など多面的に考察しながら、自尊感情という視点で、子どもたちの現状や子どもたちを取り巻く状況を分析している。

最終章には、自尊感情を程よく高めるために子どもとどう関わったらよいのか、その８つの方法が、読者の実践の手引きとなるような解説と共に挙げられている。次の通りである。

1　子どもの話に耳を傾ける
2　子どもの自尊感情･発達という視点を持つ
3　まずはお母さんが、
　　そしてお父さんも自己を肯定する
4　親の期待を押し付けず、
　　子どもを肯定的に受け止める
5　子ども自身が目標，希望を持てるようにする
6　自尊感情は低すぎず、高すぎず
7　規則正しい生活習慣の確立を
8　大人がみんなで子どもを育む社会を目指す

これら８項目のどれもが特に費用が掛かるようにも思えない。本当に基本的な教育にお金はかかるのだろうか。全く掛からないなどとはいえないが、お金を掛けなくてもできることは多くあり、子どもたちはむしろその方を欲しているのではないだろうか。秋の夜長をしばし親子、家族で語り、戯れる、そんな光景を思い描いて。

[光文社、2009年、840円]

（加知　ひろ子）